



連載第 140 回

「アニマルウェルフェア畜産」の今(その7)  
——元酪農家と獣医師の思いから——

アニマルウェルフェア(家畜福祉)の取り組みを進めるには現場の声に耳を傾けることが欠かせない。昨年発足した「北海道・農業と動物福祉の研究会」(代表・瀬尾哲也帯広畜産大学講師)では3月下旬、放牧を主体に適正規模の経営を続けた元酪農家と食育活動にも携わる若手獣医師の話を聴く「家畜福祉セミナー」を開催した。「牛も、飼育する人間も、幸せでなければ家畜福祉は進まない」と、半世紀余りの牛飼いの経験をもとに力説した月形町の久保純一さん。学生時代の動物実験を振り返り、診療活動のなかで感じた乳牛の疾病や現場の矛盾を語る八雲町の末永龍太さん——2人の家畜福祉や酪農に対する熱い思いを、講演などをもとに紹介する。



▲「北海道・農業と動物福祉の研究会」が始めたセミナーの様子(3月21日、札幌市内で)

◀高泌乳牛に増えている第4胃変位の手術風景

# 動物もヒトも同じ命との実感が 真の家畜福祉につながる事を力説

人生の最愛の友は牛だった  
家畜福祉は人間の幸せから

「家畜福祉の原点は、まず(牛を飼う)自分が幸せになること。そうでないと、牛たちに幸せを与えられません。牛も人間も、みずから持っているものを最大限に發揮して生涯を終えることが幸せの価値観につながる。家畜福祉の問題は、わたしたちがどう

生きるかを問い直す絶好の機会だと思えます」

空知管内月形町で半世紀余りにわたって酪農を営んできた久保純一さん(1940年、旧美唄町生まれ)は、家畜福祉のあり方をこんなふうに捉えている。

今年1月、最後の牛を手放して酪農経営にピリオドを打った。現役時代は、15ヘクタールほどの農地(借

地を含む)で20数頭の乳牛を飼った。

親牛は最も多いときで14頭。北海道では小規模の部類である。5月から11月まで、毎日放牧していた。

「牛は野原で生きる動物。放牧は、人間も楽ができるし、一番いい飼育方だと思えます。春になって牛を外に出すと、飛び上がって喜ぶ。牛にとって放牧や運動、日光浴は最高のストレス解消策なんですよ」

セミナーの席上、久保さんは「牛はわたしの人生の最愛の友」と強調した。こんな場面があったという。

18歳まで生きた牛がいて、屠場に送る車に載せるとき、大きな涙をこぼした。居たたまれなくなり、立ち会うのをやめて家に引き返す。

「ずっと一緒にいたから、家族になっているんだね。牛も、お別れだと思ったんだろう」





現役を引退した久保純一さん(写真左)の農場には、酪農や新規就農などに関心を持つ人たちがやってくる。この日は家畜福祉セミナーと一緒に講演した八雲町の若き獣医師・末永龍太さんが訪れ、牛舎のなかで乳牛の系統繁殖の話などを交わす(4月25日)

起立不能になった牛がいて、牛舎に行く、「何とかしてくれよ」というような表情をする。たまらなくなつて獣医師に連絡し、安楽殺するための注射を打ってもらった。「生命を奪うのも牛飼いのつらい役目かと思う。牛は人間の根性や表情をよく見る。感受性を持った存在なんだ、と実感しました」

まさに、牛とともに歩んだ人生であつた。

### 系統繁殖で優秀な牛づくり 適正規模の健全経営を持続

久保さんの牧場は、系統繁殖(注) Ⅱ同一系統内の交配による繁殖法)による能力の高い牛づくりに努めた結果、1頭あたりの生産乳量が多く、乳質も常に上位にランクされていた。小規模経営なので売り上げはそう多くないものの、所得率は50%台と高く、ずっと健全経営を続けてきた。

牧場の始まりは大正時代、まだ小学6年生だった父親が牛を導入したころにさかのぼる。月形高校を卒業して就農した久保さんは、1966年に10頭ほどの親牛を飼える牛舎を建設し、その規模を変えなかった。「食べていければいい。無駄なこと

はせず、あるものを生かして牛飼いをする」が基本。適正規模の経営を夫婦で続け、中身の充実を図った。

98年に生乳の出荷をやめるまで、バケット式のミルクカーを使って搾乳作業。バーンクリーナー(糞尿搬出装置)はなく、毎日、みずからバーンクリーナーの仕事をした、と笑う。乾草の調整も、今では主流のロール状の梱包機械ではなく、一昔前のコンパクト型を使用。設備や機械にコストをかけなかったことも健全経営の秘訣のようだ。

前述したように久保さんは、系統繁殖による牛づくりに力を注いできた。飼養している雌牛の特徴を改善できる素質を持つ系統の雄牛の精子を購入して受精させるもので、牛を丁寧に観察する能力が求められる。

「うちの2系統の牛は100年間、33代にわたり系統繁殖しました。わたしの父は『一番大事なのは牛の系統で、その次が種牛の資質』と言つて、牛の登録事業にも取り組んだ。だから、どこの農家にどんな牛がいて、どれだけ乳を搾っているか、そしてアメリカの雄牛の由来まで記憶していましたね」

と振り返る久保さん。よく働いて

くれた牛や高能力の記録を出した牛は、牛飼いが頑張るエネルギーを生み、心に残っていくという。

大規模化に走らなければ、時間に余裕が生まれる。個体改良への熱意と相まって、愛着を持って牛と接する時間も増す。それが、結果的に家畜福祉にもつながっていった。

## どの動物も生命を持つ存在 安易な乳牛の淘汰に警鐘も

9年前、『はじめたくなる酪農の本——小さな牧場の大きな夢』と題した本が出版された(非売品)。発行元は「びつくりドンキー」を展開する㈱アレフ。放牧や家畜福祉に対する関

題意識が強かった同社の庄司昭夫前社長(故人)の尽力で、6千部作成した。久保牧場の紹介を軸にしながら、酪農や牛乳・乳製品の基礎知識などをまとめてあり、新規就農を志す人の手引き書になっている。

久保さんは出版当時、家畜福祉について深く考えていなかった。今は「牛の体を洗ったり、ブラッシングや爪切り(削蹄)などをやってきた。それもアニマルウェルフェアだったんじゃないかな」と受け止めている。

半世紀余りの酪農の歩みを「達成感のある、牛たちとの人生だった」と総括する一方で、北海道酪農のあり方には懸念を抱く。

1992年に地球サミットが開かれ、生態系の保全や種の保存、生物多様性の大切さなどが議論された。しかし、その後の流れは、生乳の生菌数や体細胞数の基準がきびしくなったことなどで淘汰される牛が増え、わずか2〜3産で屠場に送られるケースも多い。その一方で、酪農家戸数の減少による生乳不足などを受け、基準緩和の動きもある。

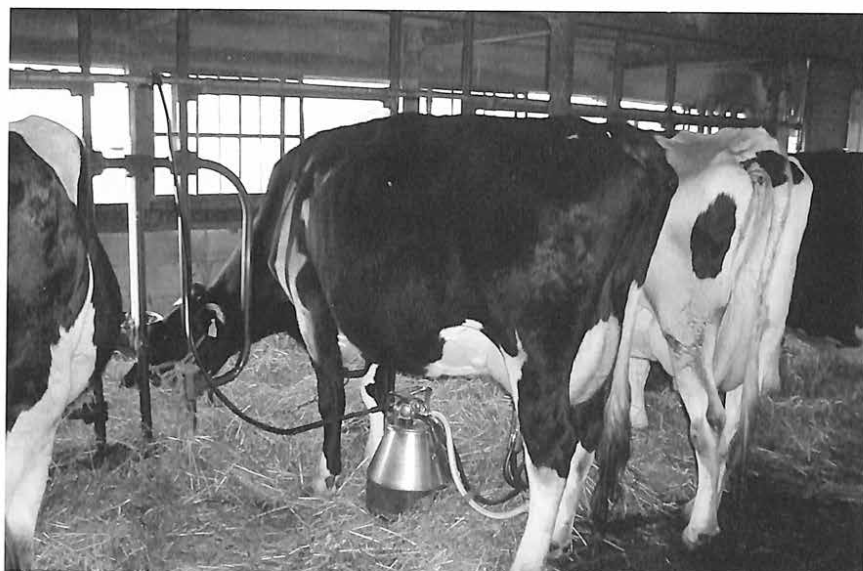
「昨年は、(生乳の生産増加に向けて)1頭あたり2万円を支給するので頭数を増やさない、というやり方

で出てきた。何かの調整や誰かの儲けの力によって、酪農家や牛たちが淘汰されるのはおかしい。構造的な問題点があるのではないか」

と久保さんは憤りを隠さない。そして、今後の北海道酪農や家畜福祉について、こう提言する。

「草など人間が食べられないものを牛たちが乳や肉に換えてくれる。あらためて、土づくりや放牧酪農、有機酪農を進め、飼料やエネルギーの自給を高めていくことが大事だと思う。最近、犬や猫を飼う家庭が増えています。ペットも牛も人間も生命を持つているんだ——という目で酪農のあり方を見てほしいですね」

現役を退いた今、久保さんは新規就農希望者の相談に応じたり、家畜福祉などの学習会に足を運ぶなど精



親牛10数頭の久保牧場ではバケット式のミルカーが活躍した(出典:『はじめたくなる酪農の本』)



久保牧場の牛たちは5月から11月まで放牧を欠かさなかった(出典:『はじめたくなる酪農の本』)

「そんな言い訳を考え、納得していくしかなないと末永さんは思った。後半の3年間、薬理学



道南農業共済組合で診療のかたわら、食育にも取り組む獣医師の末永さん

力的に動き続けている。

## 解剖や研究のあり方に疑問 搾乳のバイト体験で葛藤も

渡島管内八雲町で獣医師の仕事をはじめ6年になる末永龍太さん(1982年、札幌市生まれ)は、診療のかたわら、牛の絵を描いたり、小学校で食育の授業を手がける。

高校時代まで札幌で暮らし、インコ以外の動物は飼ったことがなかった。やがて、帯広畜産大学の獣医学科に進学。1年生のときに解剖の実習があり、エーテルの入った瓶のなかにマウスを入れて麻醉をかけ、頸椎脱臼させて殺す。動物を助けたくてこの学科を選んだ学生たちにとって苦痛な時間であり、授業を放棄したり、悶々と考え続ける者もいた。

の研究室で人間のアルツハイマー病の研究に携わる。ここでも、マウスの頭部に穴を開け、細い管を通して脳に薬剤を注入したり、安楽殺させたあとの脳でどんな反応が起きているかなどを調べたりした。

だから、卒業論文の最後に、「実験でどれだけ動物に対して意義のあることができたのか分からない」と記した。「自分のなかできちんとした答えが持てなかった。ただ、ひとつ良かったのは、こうした世界を知れたことです」(末永さん)

学生時代の6年間、搾乳のアルバイトを続けた。最初の仕事先は、数百頭を搾乳する大規模農場。早朝3時半から作業が始まり、終わると大学に行けるので都合が良かった。

「ここも葛藤を与えてくれるところでした。(搾乳前の)待機場所に行くのと、立てない牛がいる。初めは従業員に『〇番立てません』と伝えるのですが、だんだん原因を考えるようになる。おしまいには『〇番死んでます』と言うことも。これは何かおかしい、と考えさせられた」

## 短命化する牛の現状を紹介 小学校での食育授業も担当

09年に獣医師になると、酪農現場の矛盾がより鮮明に見えてきた。

穀物を大量に与えて高泌乳化を進めた結果、出産後の起立不能が増え、診療に呼ばれる機会が多い。血液中のカルシウムが乳汁に急速に移行して起きる症状で、多くの病気の根源ともいわれる。カルシウム剤を点滴したりするが、間に合わずに死んでしまうケースもある。

「草食動物の牛はもともと、人間が食べられない草を食べ、乳を出す目的で飼われていた。でも、穀類を多く与えると、第1胃に劇的な変化が起きて酸性になり、(胃のなかで)死んだ微生物が毒素を出したりする。それが脚にくると、爪先を付けずにロボットのようによく歩く。『ハイヒール

の先に画鋲を入れて歩くような感じ』と例えた獣医師がいます」

「大規模化で1頭ずつケアができなくなり、牛が短命になる。増頭した結果、リーストール牛舎のベッド数よりも多く収容し、弱い牛は寝ることができない。飼料代や電気料の値上げも加わり、牛が消耗品のようになっていく実態があります」

と、末永さんが現状の一端を語る。昨年から札幌市内の小学校で食育の授業を担当するようになった。

牛の一生などについて、子どもたちにクイズ形式で答えてもらう。牛の屠殺に携わる人の話をまとめた絵本『いのちをいたたく』を紹介すると、泣く子もいる。アンケートをすると、多くの子が「生命に感謝して食べないといけない」と書くという。

そんな取り組みを続ける末永さんは、牛乳の値段の安さに疑問を投げかけ、こう話を締めくくった。

「健康な牛を育てられる値段の牛乳を買いたくないですか? 現状を知った上で、(家畜福祉に適った飼育方をする牛の生産物を)選択できるように頑張ってほしい」

読者の皆さんにも真剣に考えてもらいたい言葉だった。

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」[takikawa.essay.jp/](http://takikawa.essay.jp/) に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。